

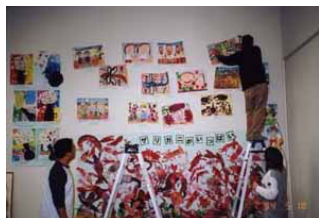
「教育の現場から」を支える、先生方の活動

第21回目となる「三重の子どもたち展」も先頃無事終了しました。例年第1～3室は、県内の多くの小中学校、盲・聾・養護学校、幼稚園・保育所（以下各校）から出品された作品を展示する「教育の現場から」のスペースになっています。この、「教育の現場から」を支える先生方の活動内容をお伝えします。

4・5月、子どもたち展の準備は、各地域でその年度の地域代表委員を決めることから始まります。同じ方が継続して担当する地域、輪番制で交代する地域があります。6月、企画運営委員会（18名）で、展覧会の骨子を作成し、その後地域代表委員会（36名）で、開催要項等について検討します。8月末、美術館から各校に開催要項を送付し出品を呼びかけると、9・10・11月、地域代表委員は出品校と種々の書類や連絡を直接やり取りし、美術館に橋渡しをします。12月、各校にポスターとチラシが届く頃、地域では作品の集荷と搬入に入ります。集荷作業を手伝う地域協力員（今年度58名）の出番もこの時期です。12月24日、展示計画作成日。搬入された作品群をどう展示するか、北勢・中勢・南勢・養護の各室に分かれ、室代表を中心に展示計画を練ります。平面・立体・半立体、種類も量も様々で、各室の展示容量に合わせて集まるわけではないので、作業は簡単ではありません。12月26日、一日がかりの展示作業日。委員の他に展示と撤収を手伝う展示協力員（今年度31名）を加えると総勢80余名にもなります。高所での展示やスポットライト設置のための台車を

運び込み、脚立に乗り、展示パネルや多数の展示台を駆使し、出品者の意向に沿うよう配慮しつつ作業を進めます。2月1日、展覧会最終日、前回同様80余名での撤収作業です。梱包し、持ち帰る作品、業者トラックで拠点校に届ける作品、後日引取る作品に分類します。搬出作業は企画運営委員が搬出場への車の乗り入れを調整し、遠隔地域を優先に進めます。以上、年間活動の流れを今年度を例に書き出しましたが、実際には、更に色々な手間、配慮、御苦労があるかもしれません。

「三重の子どもたち展」のような展覧会は、県立美術館の企画としては全国的にも数少ない例です。それが開館以来、教育現場と美術館との連携によって毎年開催されてきたことに、今更ながら驚きと感動を覚えます。そしてその『連携』を可能にしているのは、制度としての公的な保証や周囲の理解はもちろんですが、前述の委員・協力員として活動してこられた先生方、更には造形教育の現場に携わっておられる先生方の熱意・誠意に負うところが何より大きいのではないかと思います。子どもたち展が、常に現在進行形で子どもたちの声＋αを発信していく場となりうるかは今後の課題ですが、それもまた、連携しつつじっくり取り組んでいくべきものといえましょう。（第4室は「光と影」に焦点を当てた初の特別展示で、8月からの下準備も含めて展示作業には10日間を要しました。参加された有志は、殆ど地域代表委員や企画運営委員の先生方でした。）(Se)



展示作業風景 第1室・北勢地区



第2室・中勢地区



第3室・南勢地区及び盲・聾養護学校